写真の力：昭和初期の農山漁村写真が伝える日本の生活文化の原点への眼差し

黒石いずみ

はじめに

建築家の今和次郎は 1917（大正 6）年に柳田國男が主宰する白茅会のメンバーとして埼玉県内郷村の調査を行う。そして 1919 年からは石黒忠篤の紹介で農林水産省嘱託になり、生涯にわたって多くの農山漁村地域の調査を行った。和次郎は当初から、スケッチや地域分析図、統計図による視覚的な生活環境分析と民家の造形分析を行っており、その現場での体験や人々の様子の観察を記録するスケッチの魅力は、その後の民家研究の魅力を形成する上で大きな役割を果たした。今和次郎は、その民家調査の方法を 1923 年の関東大震災後の被災バラックの採集や、東京や各地での生活様式や社会空間の変化を記録した考現学採集、そして東北地方におけるさまざまな生活・住宅改善調査へと展開した。また 1931（昭和 6）年の大凶作と 33 年の三陸地震津波を契機として、東北の生活改善の対象として民家が注目されるようになると、1932 年に雪害対策調査会、33 年に積雪地方農村経済調査所が設立され、東北の住環境や生活環境の専門家として今和次郎は指導的役割を果たした。

今和次郎とその右腕だった竹内芳太郎の資料を収めている工学院大学のコレクションには、彼らが 1935（昭和 10）年から 6 年間にわたり、同潤会と日本学術振興会の委託事業として各県や市の技術者たちと協力して、東北地方の住民の衣食住の改善事業を行った際の調査資料が残されている。その調査で竹内によって撮られた白黒の記録写真は、800 枚をゆうに超えた膨大なものだが、その写真の一つ一つは、ファイル化されており、傍には簡単な地名と説明があるだけで、それまでの民家調査とは異なる客観的な地域資料として収集されている。

（ 左：竹内コレクションの写真例）

今和次郎とともに調査を行い、住民の目線に立った分析と提案を行った竹内の写真資料が、なぜここまで冷静なのか？1930 年代の調査において写真はどのような役割を果たし、そしてそれは現在どのような意味を持つのか？つまり、この写真は現在の地域の歴史的資源としてどのような意味を持ちうるのか？このような問題意識に立って、本研究は、工学院大学に保存された竹内コレクションに含まれる調査写真を対象に、その全体的な背景の把握を行うとともに、その特徴と現在的な文化資源としての意味を検証する。

論考は次のような構成で行う。まず今和次郎と竹内芳太郎の、民家調査における採集と記録の姿勢について考察し、次に東北調査で前提とされた東北のイメージの背景を確認する。そ

して竹内の写真が報告書の中でどのような役割を果たしたかを考察した上で、竹内の訪れた場所のうち福島を中心として後追い調査を行う。そして 80 年後の現在の民家の様子から、竹内の写真の地域の文化資源としての意味を考察する。

民家調査における採集の姿勢とスケッチや写真

今和次郎の調査記録には、各地に残る歴史的で特徴的な屋敷のほかに、普通の茅葺農家や質素な庶民住宅を対象としたものが多く含まれている。ほとんどのスケッチを和次郎は鉛筆でノートに描いており、建物の全容、特徴的な細部、周囲の佇まいや生活道具の配置、そして時には地形や街並みの様子なども描いている。そしてその傍には、常に観察で気づいた事柄や印象、出会った人から聞いた生活の様子などがメモされており、和次郎の日本の 1920 年代の建築の潮流に対する問題意識を反映した独自の建築観が現れている。

その特徴として第一に挙げられるのは、細部を重視して素材と造形の魅力を重層的に把握する点である。それは単純な素材の真正性や機能性ではなく、自然との共存のなかで長い時間を経て生み出された細かな工夫と多様な質感を重視する視点である。

第二に特徴的なのは、建物の形態が同じ建築形式の再現であっても、個別の場所や条件で微妙に異なることや、生活道具と一体に実際の生活空間として機能している様子を描写していることである。つまり歴史的に形成された典型の意味を探り、その変形の原因を創造的なものとして解釈し、単独の造形に創造性を見出した 20 世紀のモダニズム理念とは異なる視点が窺われる。第三に重要な特徴は、人々にとって日々の暮らしのなかの自然な喜びがもたらされる場であることが建築造形として重要だと考えていることである。

第四に挙げられるのは、上記のような考えがあるために土間や玄関などの生活空間がさまざまな行為の場としての多機能性を備えていることを、意図的に描いていることである。人々の生活は、実際は多様な社会的関係性や機能が融合して成立しており、その曖昧で可変性のあるつながり、そして習慣性を持つ行為の場が重要なことを彼は自覚していた。

そして最後に、住まいと周囲の自然環境との生業や気候に適応した持続的な関係と、歴史的な社会的論理が融合した地域全体の空間構成を、その生活道具や人々の様子を含めて描き出す総合的なアプローチをしていることである。

人々の生活にあるこれらの意味が多様に読み取れる民家スケッチは、近代化のなかで我々が忘れてしまった生活の場としての住まいの豊かさを、その細部と環境との関係から描くことが目的となっており、そこにはジョン・ラスキンが説くところの「詩」的な要素が含まれているのは明らかである。

東北のイメージと調査の視点

しかし 30 年代以降の東北には、上記のような詩的な農村生活の豊かさを描く状況とは明らかに異なる厳しい状況があった。毎年のように続く飢饉やそれに伴う悲惨な状況が 1930（昭和 5）年初頭の災害によって頂点に達し、小作争議が増大して緊急の救済策が求められてい

た。そしてその背景には、1931 年の満州事変勃発以後、植民地へ労働者や農民、兵士を供給する地域として東北地方が重視され、政策的にその生活環境の改善が求められた事情があった。その結果、東北地方は気候的に困難な地域というだけではなく、社会や産業の後進性が集約された場所とみなされ、その辺境、救済されるべき場所のイメージが増大された。東北更新会という名に見るように、その方言や地域の歴史的習慣や家族関係、厩と一体化した住居、生活様式全般が、合理性や清潔を欠くものとして問題視され矯正する事が目指されたのだった。

そのような政治的状況によって「造られた東北イメージ」の問題を、歴史学者の河西英通は戊辰戦争で西南の官軍が勝利して開化の象徴になったことに対比して東北に植え付けられた後進性、未開地という自己意識から始まっていること、そして 1910 年代からは米を中心とする第一次産品と北海道拓殖への労働力供給地、また外米や肥料・軽工業品の移入地として、帝国主義国家化した日本の『国内植民地』となった事によると説いている。

では今和次郎らはこの政治的な問題やイメージの問題にどのように向きあったのだろうか？その旺盛な調査採集旅行の移動距離と、現地の場に身を置いて実際の物や住まい、地域の様子を調査する方法には、そのような問題を乗り越えるために、彼らがあくまでもまずは人々の生活の現実や心理をしっかり把握すべきだと考えたことが示されている。つまり今和次郎と竹内芳太郎は、東北の問題に対して固定的な近代化概念やモダニズム運動の理念、「造られた東北のイメージ」から意図的に距離をおき、俯瞰的に、そして共感を持って現状を理解しようとしたと言えよう。

地理学者のジョン・アーリは、『モビリティーズ－移動の社会学』（2015 年）のなかで、移動の概念を異なる地点の間の動きとしてだけでなく、その移動を可能にする仕組みや、その移動における体験が人や社会に与える影響を含めて考えるべきだと論じている。つまり、東北の近代化を人口の移動や他者の来訪による影響と結果だけで論じるのではなく、近代化そのものが、多くの人々の移動と交流によって政治的に、体験的に、実体化・空間化し変化していくことであり、その移動する人のさまざまな属性によって多面的に形成される過程を考える視点が重要なのである。

そう考えると、和次郎の東北調査旅行には、それ以前の民家調査の郷土主義的意識や、東北出身者としての地域の問題の理解、さらに東北振興会や更新会に存在した被災地を救済し改善しようとする社会主義的思想だけでない、もうひとつの興味深い特徴を見出すことができる。それは彼の『働く人の家』（1947 年）の記述に見られるように、彼が東北各地から北海道へ、そして満州から朝鮮へと、しばしば連続して旅行していた事である。つまり東北は当時、日本の中国や韓国進出のひとつの窓口、同時期の世界で起きている帝国主義的な植民地化や戦争の流れの最先端であり、和次郎はそのような国際的な枠組みから東北を捉えていたと思われる点である。つまり帝国主義的な植民地化や戦争の流れに伴って、各地で引き起こしている問題が、東北でもまた行われる事、すなわち河西の言うところの「国内の植民地化」を自分達が行う危険性を彼は意識していたのではないだろうか。

従って、東北調査の資料は、救済されるべき東北、懐古されるべき東北、改善されるべき東北のいずれの立場も排除して、あくまで冷静に、そして多面的な情報を可能な限り集約したものであることが必要だった。この調査の母体である学術振興会の小委員会の代表は医学博士の小泉親彦であり、国策として東北の実態調査と衛生を重視した生活改善を行うために科学的な客観性を重視していた。そして現地調査者としての今和次郎や竹内芳太郎自身も、自分達の調査の方向性やその表現により上記のような東北イメージの政治性が加速されることを避け、自分自身の情緒的判断を抑え、問題の細部を正確に伝えるために、スケッチは用いずに写真を用いたと思われる。

報告書に見る竹内の写真

1935 年からの東北地方農山漁村の住宅や生活に関する調査は、6 年間に及ぶ長期的なものであり、東北 6 県（青森・秋田・岩手・宮城・山形・福島）で行政や専門家が現地調査を行い、地方の人々の住宅改善意見を集めるために懸賞募集を開催し、改善のための住宅案も提示する大規模なものだった。それらの成果は、一般にもわかりやすく『東北地方農山漁村 住宅改善要旨』にまとめられ、住民に配布された。そこでは住宅改善の方向を広すぎない事、収納が十分である事、部屋の配置が便利である事、明るく換気がよく衛生的である事、作業場や厩舎がうまく配置されている事、強固な構造であること、修理に金がかからない事が推奨され、住宅設計案も、気象への適応、外部空間や作業所との関係、土間や厩舎、寝室、流しやかまどや食卓の改良に重点を置いて提案され、これらの意見や提案は、生活の細部をよく理解し、現実的な方策を考案したものであり、その調査が実際の状況を理解したものだったことを示す。

竹内が残した資料から窺えることは、その旅程が各県の特徴的な民家が集中している場所を、現地の行政の支援を得て、鉄道と車を用いて効率的に、そして広範に回るものだったことである。その各地の民家が同じサイズとアングルで撮影されて並べられた写真からは、この調査では一軒ごとの細かな建築的造形よりも、その地域の気候や生業、生活様式、社会条件と歴史的な住まいの形態や周辺空間との関係に注目し、比較検討することが意図されていたように見える。またそれに並行して、各々の地域の代表的な事例である個人宅を訪問して、その生活様式や歴史的な住まいの間取りの採集も行って、すまい方の客観的分析が行われている。つまり初期の民家調査で求められた地域性や可変性、人間的な総合性を重視する建築的視点から、より論理的な体系性を見出そうとする視点へと、調査の方法が変化していることがわかる。

1941 年に出版された報告書で用いられている写真は、文章が伝える意図と情報に客観的な視覚的情報を与える場所と、共感的な効果を与える場所にそれぞれ適切に配置され、客観的資料を集めて地域の典型を論理的に考察しようとする調査の目的をサポートしている。その一方で、全体としての作者の姿勢を暗黙のうちに感じさせるのは、今和次郎とともに竹内が民家調査で常に心がけていた、現実の内部にたちつつもそれに没入せずに、環境の全体と

同時に細部や見えないものに目を凝らす姿勢である。

（上「東北地方農山漁村住宅改善調査報告書Ⅰ」に用いられた竹内の写真）

スーザン・ソンタグはその写真論の中で次のように述べている。「写真はただ現実を記録する代りに、事物の私たちへの現われ方の基準となって、それによって現実の観念、レアリスムの観念そのものを変えてしまったのである。」（94 頁）また「個々の写真は断片にすぎないから、その道徳的、情緒的な重みはそれがどこに挿入されるかにかかっている。一枚の写真はそれが見られる文脈によって変るものである。・・・これらの状況はそれぞれ写真のちがった用途を暗示しているが、どれも写真の意味を確実にすることはできない。」(112 頁)。今和次郎や竹内芳太郎は、このソンタグが説く写真の力と特性を彼らなりに理解していたと思われる。そして、東北の既存のイメージに流されないで客観的な問題を描くために写真を利用し、意図的に文章と組み合わせて配置することで現状の解釈を助け、調査の目的である状況問題の論理的関係を明確化した。しかしその一方で、彼らが形象からだけではわからないものを見極めようとする姿勢も、素材感や環境、光の表現に表れていたと言えよう。

竹内写真の追跡調査

そこで本研究の作業として、竹内コレクションに残されたサムネールサイズの写真を全てスキャンして県ごとに整理し、そこに付記された地名を各県ごとに地図にプロットした。そしてその旅の経路と日程、調査対象となった民家の個別の住所と住人の氏名を現在のそれと対照する作業を行った。しかしながら、80 年以上前の住人の氏名を調査するには公的な機関の許諾が必要で短期的には不可能な部分が多く、電話帳での調査には限界があった。また地名はしばしば市町村合併などによって変更されていた。調査で用いたと思われる鉄道や道路も廃線や変更が頻繁に起こっており、追跡調査が非常に困難な作業であることを改めて認識した。

そんな中でも、竹内コレクションの写真に添えられた村落名を地図に落とす作業は、多くの方々の協力を得てなんとか完成し、4 月から始まった「東北へのまなざし」展で展示することができた。そして、柳宗悦やブルーノ・タウトの東北旅行に比べて、その対象となった地域の広範で網羅的であることがわかった。竹内らによる、東北地方を自分自身で体験し、人々の生活の全体を総合的に観察し、その歴史や社会背景を含む詳細な現地調査から問題発見をしようとする姿勢と執念を感じた。

そこで、コロナ禍で限定的な活動範囲と活動期間ではあったが、福島県の内陸部を追跡調査して、竹内が何を見て何を考えたのかを理解することを試みた。（沿岸部は東日本大震災で大きな影響を受けており、かつての集落が残っていない例が多かったので、対象から外した）竹内が写真に撮った福島県の民家の後を追跡したが、前述したように、個別の民家の特定が不可能だったので、竹内が見た地域の民家がどのような傾向を持つものだったかを見る第一段階調査であった。

まず行ったことは、グーグルアースとストリートビューで該当する地名の一帯を訪問前にチェックし、その村落のどの地域に歴史的民家が含まれるような古い地域が存在するかを特定した。

次に現地を車で訪問してわかったことは、30 年代の調査では東北地方の民家の衛生問題（採光、通風、採暖、排煙、給水、排水）、構造問題、経済問題の究明が目的だったが、2021 年の段階では、多くの場所が新しい住宅の立ち並ぶ市街地となっており、明らかに問題がある住居に人々が居住している例は見られなかった事である。それを確認するには、より個別の

住居の内部を訪問調査する必要があった。また今回調査した範囲では、竹内の写真に映る茅葺き屋根の住居は存在せず、茅葺き屋根を鉄板などで覆った事例があるのみだった。
次にわかったことは、養蚕はすでに産業として衰退し消滅したにもかかわらず、養蚕農家住宅が各部落に残存していることだった。そして多くが新しい住居と併設されて、多世帯同居の空間として現在も使用され、あるいは物置として用いられている様子だった。それぞれが街道筋や山間部などの立地の積雪、風や日照に対応して配置され、雪囲いや煙抜きの工夫がされていて、一見何気ないが個性的な形態だった。また雪の多い地方であるにもかかわらず、開口部が比較的広くガラスが用いられており、採光と換気の仕組みが重視されていることがわかった。

1941 年に出版された報告書には、福島県が養蚕の盛んな場所で、養蚕に適した形態の住居が多いこと。また、その機能的・環境的な温度や光の調整のために、間取りや構造、開口部が独特の発達をして産業としては合理的だが、人間の居住環境が犠牲になっていると述べられていた。竹内がこの時期に行った他の研究成果を見ると、おそらく竹内は調査の過程でこの養蚕農家の機能と間取りや構造、設備の仕組みの変化に気づき、本来の東北全般での農家の問題の調査とは別に、産業近代化に伴い変形する家屋として関心を寄せたと推測された。そして改善事業の結果、竹内が調査した地域には、現在開口部や居住環境が改善された養蚕農家が多く残存しているのだと思われ、その調査から提案、実現への過程が実現されたことが窺われた。
各地域を見学している間に、一軒だけ偶然養蚕農家の内部を見て住民に聞き取りをすることができた。内部空間は、現在は農機具や多くの家財で一杯になっていたが、屋根の換気口や１、２階の大きなガラスの開口によって十分な採光と換気が可能になっており、縁側や土間の作業場、そして吹き抜けの大きな居間が養蚕を中心に暮らす生活様式と人々の快適性の両方を満足できるように工夫されていることがわかった。

その家の 60 代の農業を営む夫婦のうち奥様が次のように語った。
「両親や子供がいて家族が多かったときはこの家を使っていた。新しい家を建ててからは農業資材や増え続けた生活財の置き場にしている。今度片付けて地域の集いの場所にしたいと思う。近代的な住宅は光熱費が高くつくが、古い家は空間に余裕があり、天気に合わせて開口部を自由に開閉できるし、冬以外の季節なら十分快適に使える。皆で集まるのに雰囲気もいいし、若い人にも昔はこういう家があったことを伝えたい」と。
今回の研究では、竹内写真のデータ化とその福島県調査のみを追跡することに終わった。しかしその過程で分かったことは、民家が産業変容と地域環境に適応しながら、採光や通風・換気・中間領域が活用され、更新され続けてきた状況だった。そして現在、その民家の更新は、コミュニティの核としての機能に展開している事を把握した。

結論：1930 年代民家写真の現在的意味

本研究では、竹内芳太郎によって東北地方農山漁村生活改善の報告書のために撮影された 800 枚を超える写真を検証することで、1930 年代の東北地方の住宅と生活改善のための調査では、非常に広範な地域の現地調査が行われ、改善の問題意識として当初掲げられた住まいの構造、経済、衛生という視点から、当時の一般社会や政治的場面で広がっていた、辺境というイメージにとらわれない客観的な調査が長期にわたって行われたことが改めて確認できた。そして今和次郎や竹内は、彼らが従来抱いていた地域的特徴や歴史的習慣、住民の主体性を尊重する住宅改善理念を、その客観的調査の通低音として持続しながら、写真による実態調査によって、それをより具体的な資料として他者に共有し、さらに実際の住宅改善案の設計へと役立たせた事を明確にした。さらに、竹内芳太郎は大量に写真資料を集めて比較することで、養蚕農家に注目してその研究をさらに深め、それが地域環境に適応しつつ、変化する仕事と暮らしを健康に営むために採光や通風・換気・中間領域を活用している様子を明らかにした。このように、複眼的な視点、さらに社会や環境の絶え間ない変化や人々の移動で、実体化・空間化していく造形の意味を読み取る視点の形成が、この東北調査においてスケッチから写真へと展開した今和次郎と竹内芳太郎の試みの大きな成果だったのであろう。本研究は、その民家の更新が、さらにコミュニティの核としての機能に展開していく様子を把握し、上記の複眼的視点が現代にも有効である事を確認した。
研究期間の作業として終わらせることのできなかった問題は、この民家の写真が現代においてどのような意味を持ちうるかを、さらに文化資源論的に調査研究することだった。建築行政の領域では、歴史まちづくり制度や歴史的景観保存の制度などが次々と定められて、現在地域の観光資源の発掘と振興に役立てられている。日常の生活景観も十分観光資源として役立つことが認識され、各地で古い民家のリノベーションや活用が進んでいる。確かにこの竹内の写真はその潮流に対して有用な材料を提供するものではあるが、実際の調査でわかったことは、これらの民家が時代の変化を生き延びてきた有様が地域の生活史のダイナ

ミズムを象徴していることこそが重要だという事である。ソンタグはその著作の中でカフカの写真論を引用し、写真が容易く経験を商品化する働きをすることで、我々が現実の経験の意味を忘れてしまう危険性を示唆している。容易く知ることのできる観光の消費対象として、民家を修景することは、そこに蓄積された目に見えない価値で織りなされている生活史の意味を失わせ、地域の文化資源としての喪失につながる危険がある。むしろ住民自身の生活に役立つ方向への変化を支援すべきだということである。つまり文化資源は誰のものかという問題である。

東北の生活や住宅改善の対象とされた問題の多い古い民家、あるいは懐古的な魅力に満ちた現代からかけ離れた民家という既存のイメージに引きずられ、国内での新たな「植民地化」をするのではなく、民家の保存や地の文化資源の保存、活用は、あくまでもそれらが地域ごとに持続更新されてきた仕組みの強さを見直し、その変化が住民によってさらに進められることを支援することに重点をおくべきだと思う。客観的であるが故に新たな視点を招くことのできた竹内写真は、そのためにこそ役立つものだと思った。本研究で取り掛かった竹内写真の追跡は、今後も地域の行政や研究者、住民と協力して徐々に進めていきたいと考えている。

参照文献

アーリ、ジョン『モビリティーズ－－移動の社会学』吉原直樹翻訳、作品社、2015 年
河西英通『東北－－つくられた異郷』中公新書、2001 年
黒石いずみ『東北地方の震災復興と今和次郎　ものづくり暮らしづくりの知恵』平凡社、2015 年
今和次郎『働く人の家』相模書房、1947 年
今和次郎「朝鮮の民家―」建築雑誌 445 号、1923 年、273-320 頁
ソンタグ、スーザン『写真論』近藤行人翻訳、晶文社、2018 年
日本学術振興会『東北地方農山漁村住宅改善調査報告書』日本学術振興会、1941 年